特集【巻頭対談】

継ぐ・生かす・挑む

そこから見えてくる、新しいまちのかたち

巻頭対談 ■ 聞き手／福智町長・嶋野 勝

interview

福智町の新しい図書館・歴史資料館の設計チーム、大西麻貴さんと、上野焼宗家 渡窯十二代の渡 仁さん。気鋭の若手建築家と、伝統の世界に生きる陶芸家。内と外から福智町を見つめる2人が、守ること、受け継ぐこと、伝えること、そして変わってゆくことについて語ります。そこから見えてきたもの――それは、私たちの新しいまちのかたちでした。

上野焼 渡窯 十二代窯元 **渡 仁** *Artist ● Watari Jin*

×

建築家 **大西麻貴** *Architect ● Onishi Maki*

interviewer 福智町長 **嶋野 勝** *Mayor ● Shimano Masaru*

■ まちづくりの拠点というテーマと向かい合う

嶋野／今日はどうぞよろしくお願いします。大西さんは、平成28年度に開館予定の「福智町立図書館・歴史資料館」の設計で福智町と関わられることになったわけですが、実は渡さんと意外な縁があったとか？

大西／そうなんです。渡さんの窯に初めて伺ったとき、器に何だか見覚えがあるなと思ったんですが、何と私が知人から結婚祝いにいただいた器が、上野焼、それも渡さんの作られたものだったんです。

渡／僕もそれを聞いて驚きました（笑）。

嶋野／上野焼を通してお2人がつながっていた。うれしいことですね。大西さんは、福智町に何度か滞在しながら設計を進めていらっしゃいますが、この間、面白いと感じたことや発見はありましたか？

大西／はい。私たちが今回福智町のコンペに参加したのも、「まちづくりの拠点になる図書館・歴史資料館」というコンセプトにひかれたからなのですが、町民の方々、特に中学生をはじめとする若い方々が積極的にこのプロジェクトに関わってくださっていることがますすごいことだと思いました。

渡／大西さんが8月に1週間滞在されたときも、中学生が毎日現場に足を運んでいましたよね。彼らの姿を見て僕も感動しました。

嶋野／「ふくトラ」（※1）も彼らが自発的に結成したものですしね。私も今後の彼らの活動には、密かに期待を持っています。

大西／彼らのおかげで施設を誰がどんな風に利用するかといったイメージが私の中でも具体的になりました。彼らがすごいのは、自分たち若者のことだけじゃなく町全体のことを考えているところ。年配の方に施設の利用についてインタビューしたり、バリアフリーについてもちゃんと考えている。彼らに言わせると、「だってそれは、結局は自分たちのためだから」と。視野の広さに驚かされます。

■ ともにつくる プロセスを大切に

嶋野／大西さんは名古屋のご出身ですね。建築家を志したきっかけは何だったのでしょうか？

大西／先ほど「ふくトラ」の中学生のお話が出ましたが、私のきっかけも中学時代でした。家族旅行でスペインに行く機会があり、そこで、建設中の「サグラダ・ファミリア」（※2）を見たんです。建築家ガウディはすでに亡くなっているのに、その意志を引き継いで、時代を超えてなお多くの人が建設に携わっている。時代を超えてみんなで追いかけられる夢を描くことができる「建築」ってすごいなと。そこからですね。多感な年頃でもあり、あのときの驚きは今でも忘れられません。年月を経て、職業として建築に携わる立場になり、あらためて建築を通してどんなことが可能か今考えています。

嶋野／日本の伝統的な家屋も独特のものだと思いますが、現代の建築家である大西さんから見て、どのように感じられますか？

大西／日本の建築は木造ということもあり、修理をしながら長く残っていくものですよね。大学時代は京都で過ごしましたが、お寺で若い住み込みの方が丁寧にぞうきんがけをしていたり、毎日大工さんが来てどこか直しているといった光景が印象的でした。建物というのは、人や地域に愛されてこそ大切にされ、残っていくんだな、と。今回の図書館・歴史資料館の設計をすすめるなかでも、福智のみなさんの視点を大切にし、ともにつくるプロセスを楽しむことで、多くの人が愛着を持ち手をかけたくなる場所づくりを目指したいと考えています。

※1
「ふくトラ（FUKUCHI TRIANGLE）」
赤池中・金田中・方城中の生徒会が自主的に結成した、図書館・歴史資料館を考える町民グループ。図書館・歴史資料館関連の他にも、町内の様々なイベントを通じて活動している。

※2
サグラダ・ファミリア
スペインの建築家、アントニ・ガウディの作品の一つとして知られる教会。1882年にバルセロナで建築が始まり、ガウディの死後130年以上が経った現在もその意志を継ぐ人々の手によって建設が続けられている。2005年にユネスコ世界遺産に登録された。

失われない品格が上野焼の伝統

嶋野／渡さんは上野焼宗家という大変に伝統ある家にお生まれになったわけですが、その重みなどを感じることはありますか？

渡／もちろんあります。一昨年、父が亡くなったこともあり、年々強く感じる様になっています。

嶋野／400年もの歴史がありますからね。

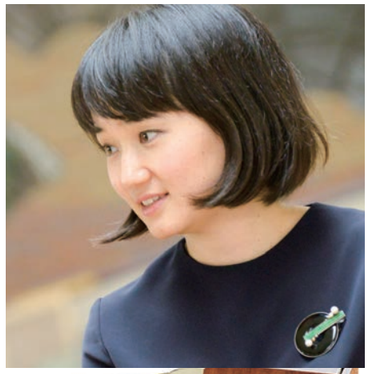
渡／上野焼は、時代背景もあり、衰退と復興を繰り返しながら育ち磨き上げられてきたやきものです。作風は時代とともに変化していて、初期のものと現代のものでは趣きが異なるものもかなりあります。ただ父・久兵衛（※3）が繰り返し言っていたのが、「品格のあるものを作れ」ということ。上野焼はもともと茶陶が起こりですから、その心を忘れてはならないと。僕は窯に入って20年以上経ちますが、父の代にはなかった技術や道具を取り入れて、新しいデザインの作品もたくさん生み出しています。そんな中でも、「技術より品格」という父の言葉は常に胸にあります。かたちは変わっても、脈々と受け継がれる心、大切なものは変わらない。これは上野焼だけではなく何百年も続く伝統的な技や芸に携わる者の肝にある信念のようなものだと思っています。

嶋野／渡さんをはじめ、窯元のみなさんが力を合わせて、伝統を守りながら上野焼の新しい文化を発信していただくことが、このまちの魅力をさらに多くの方に知っていただくことにつながると思います。

渡／新しい図書館・歴史資料館がその発信の拠点になるといいですね。もちろん僕もお手伝いします。多くの方々に上野焼の良さを知っていただく機会にもなりますし。

何を伝えるか、誰に伝えるかを考える

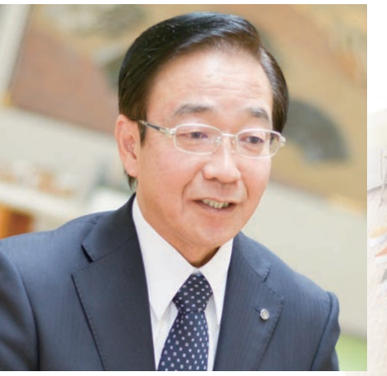
嶋野／大西さんは、図書館・歴史資料館の設計を通して初めて福智町に来られたわけですが、印象はいかがですか？



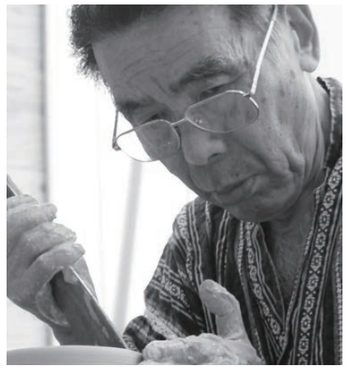
大西／こわだりや哲学のある農家さん、元気なお母さんたち、伝統を守りながらしっかりとご自分の作品を作っておられる上野焼の窯元の方々…、福智町は食も豊かと聞いていますし、人もとても魅力的。設計を進めるなかで私たちも何度か滞在して、生産者さんや食のキーパーソンの方からお話を伺ったり、子育て世代の方々と意見交換をしたりしていますが、そんな町の魅力を掘り起して伝えていけるような施設を作りたいと思っています。何を伝えるか、誰に伝えるかを探すことからスタートする設計方法は、私たちにとっても新しいチャレンジです。

渡／それにしても、最初図書館・歴史資料館を作るという話を聞いたときは、まさかこんな施設になるとは思っていませんでした（笑）。従来の図書館のイメージと全く違います。

大西／建築って、ただ建物をつくるということではなくて、やはり地域のみんなでつくるもの、一緒に立ち上げる喜びが根本にあると思うんです。誰のためにどんなものが必要か、それをみんなでイメージしながら決めていく。そこに心があるからこそ、地域に愛される建築になるのではないでしょうか。みなさんとともに作りあげる新しい図書館・歴史資料館がどのようなかたちで完成するのか、私もとても楽しみです。



嶋野／先日、「ふくトラ」の中学生たちが「大人になってみんなバラバラになっても、この図書館で会いたいね」と話していたんですよ。その光景を想像して、とても嬉しかったですね。



※3
上野焼宗家11代窯元　渡久兵衛
福岡県田川郡上野村（現・福智町）に生まれ、渡窯十一代を継承する。
昭和41年に日本工芸会第一回西部工芸展入選、以後出品を重ね、昭和49年には、日本伝統工芸展初入選、以後入選を重ねる。昭和52年に日本工芸会正会員に推され、大英博物館、福岡県立美術館等に作品収蔵、皇太子殿下に作品献上する。全国各地にて個展開催多数。
福智町誕生の際には福智町文化連盟の立ち上げに尽力し、初代会長として、また文化財専門委員としても、幅広く町内文化の振興に努めてきた。筑陶会を結成し、技術向上や後継者育成も行ってきた。2014年84歳で永眠。

【第一章】iあふれるまち・福智ing

町制施行10周年

動き出す福智

受け継ぐ宝、目覚めるポテンシャル、そして情熱。
郷土への「愛」と、発信したい「魅力」が福智町を大きく動かす。

巻頭対談 ■聞き手／福智町町長・嶋野 勝

渡 仁×大西 麻貴

■独りよがりからは何も生まれない

渡／大西さんのお話を伺っていると、僕の仕事にも共通する部分が多々ある気がします。例えばやきものは地域に息づくものですから、風土や、気候、人間性までもが作風に影響しやすい。そして、創作する際はさまざまに使われるシーンを想像することを大切にしています。自由な発想で僕の想像を超える斬新な使い方をされるお客さまもいて、それがまた創作への刺激になります。独りよがりでなく、使う人とキャッチボールしながら創ってゆくこと。それが、地域や人に愛されるものづくりにつながるのではないかと思います。だから大西さんの姿勢にはとてもシンパシーを感じます。町制10周年を迎えましたが、これからは「福智町」になってから生まれた子どもたちがどんどん育っていく世代になります。彼らのためにも、福智町にいたい、ずっと住みたいと思える魅力あるまちづくりのために、やきものの可能性を活かして、少しでも貢献できるよう、お手伝いをしていこうと思います。

嶋野／お二人とも、とても力強く愛あふれるお言葉をありがとうございました。町長という立場からも、私という個人の立場からもとても勇気づけられました。新しいものと、受け継がなくてはならないもの。両者が手を取り合うことで、より良いものが生まれ、輝きを増していく。それはまさに、私たちが目指す新しい福智町のかたちと言えるでしょう。簡単ではありませんが、諦めず取り組んでいかなくてはなりません。まちづくりも建築や器づくりと同じ。いつまでも親しまれ愛される福智町をつくっていくために、私も先陣を切って努力してまいりたいと思います。

建築家　大西麻貴
（おおにし　まき）
昭和58年愛知県生まれ。東京大学大学院卒。博士課程在籍中、百田有希氏と設計事務所「o+h」を設立。学生時代から数々の賞を受賞するなど、近年活躍が目覚ましい若手建築家。

渡窯　十二代　渡 仁
（わたり　じん）
昭和43年上野焼宗家に生まれる。東京造形大学彫刻科卒業後、アジアを周遊。平成6年、上野に戻り父・久兵衛氏に師事。日本陶芸展、日本伝統工芸展など入選多数。

福智町長　嶋野 勝
（しまの　まさる）
昭和32年生まれ。弁城出身在住。法政大学経済学部卒、元学習塾塾長。平成8年から旧方城町教育委員会教育委員、委員長を歴任し、平成18年に福智町教育委員会教育委員となる。平成22年には福智町教育委員会教育長に就任し、町の教育行政を牽引した。平成26年より福智町長に就任。